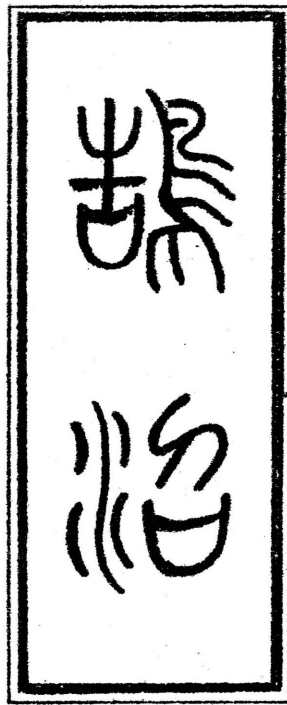


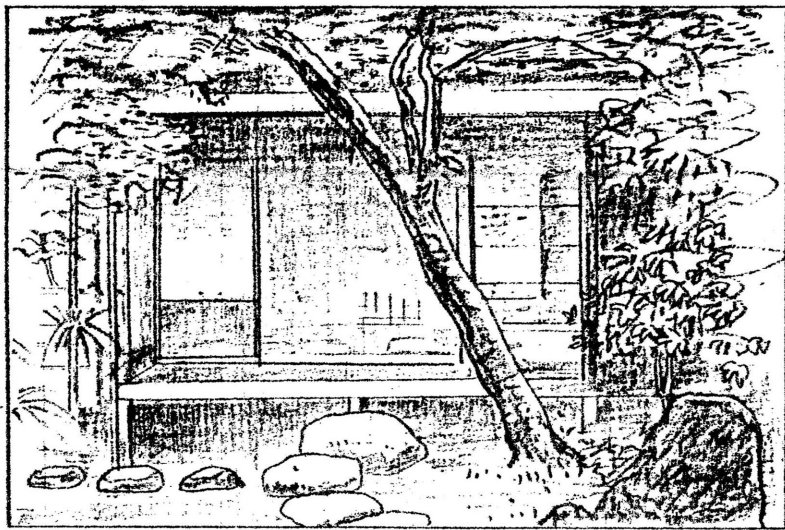
はまゆうと桜貝と

海光るわが故里



昭和六十年七月号
通巻第二十七号

鵲沼を語る会



龍之介の生涯を閉じた日端の書齋

市堂模写

終戦後の鵠沼

——「鵠沼天狗会のこと」——

田中まさ子

記憶も年ごとにおぼろ気になるが、私はぜひ書いておきたいと思いたった。それは当時

町内会を通じてつきあいが生まれた^{によ}女人達のことである。

隣組も町内会も敗戦により変わって来た。常会のあり方も変わったが、今まで仲よく少ない物資を分けあったり、明日の不安を語り合ったお互いの人情がそう簡単には失われるものではない。

町内会は続いていたある日、誰が言い出

しっぺかは忘れたが、

「折角町内に六代目（尾上菊五郎）が住まわれて居られるのだから一つお願いして、踊りを見せていただこうではないか」と□を切った。そりゃいい、有名な六代目の踊りがこの鵠沼で見られるなんて夢のようだと、みな拍手をした。

その頃、人を集める町内会はいつも湘南学園の体育館を借りていた。場所はここと定めた。早速人を通じて六代目の意向を確かめたら、六代目は町内のことなら

「ようござんすよ」と言われたそうだ。

さあみんな喜んだ。毎日の凡て足りない生活の中で、歌舞伎座のことも芝居のこともすっかり忘れて、トゲトゲした感情の中に安ら

ぎがほしかったのだ。

簡単に喜んでその日を待っていた。

しかし、物事はそう上手く行くものではない。落ち着いて考えてみるに、学園の体育場はあまりにも粗末であるし、踊りには付きものの所作台、山台をどうして調達して入れるかと首をひねった。それに六代目が「ただ」で踊って下さっても、後見長唄おはやしの祝儀は欠かせない。当時の金で？万円^{ウシ}である。

この金は町内会では無理である。言いだしつぺも役員も太いため息をして、この話は実現に至らなかった。

折角楽しみにしたのにとがっかりした
がまた考えた。毎日お芋ばかり食べていた
のによい考えが浮かんた。それはこの際、

町内会の親睦を兼ねて演芸大会とゆこうではないか、と隣組の中で一芸を持つ我と思わん方は進んで出て下さいと通達した。

さて、開いて見たら正に一驚した。では演^やろうという人はまったく素人^{しらうと}ばなれのした一芸をそれぞれ持つておられた。

めったに常会でも会うことのないご主人奥さんお子さんお孫さん方というにぎやかな顔ぶれで、邦楽、踊り、タップダンス、謡曲、民謡、詩吟、琵琶、手品と、多彩な演芸大会となつて、一段と親睦を高め大成功であつた。これに気を良くして、その後三、四回したかと思う。

それから、世の中も少しずつ落ちついてきた頃だった。敗戦のまじめさを早く忘れたかつ

たせいもある。明るいことを求めたことも無理からぬことである。さて、今度はもつとよい会をつくろうということになった。

幸いなことに今度はスポンサーが付いた。

日本橋にある老舗の料亭の寮が、鵜沼にあって、そこのご主人夫婦が気持よく会場を借りて下さった。ご夫妻とも小唄清元の名手である。だんだん鵜沼に住む一流一派のお師匠さんとも近づきになって本格的なものを望むようになったが、これが演出する裏方としてはハタと困った。誰が会主となって金を作るかということでモメたのだ。

これは単なるおさらい会ではない。各自一派の名取さんであるから、モメた末、名前が決まった。「鵜沼天狗会」と付けた。豪華な顔

ぶれであつた。

その当時の出演者は大方他界された。今だから話せるが、その昔、新橋、よし町、赤坂、柳橋の名妓たちであつた。実業家の別荘に住って居られた。

私が清元を教え貰つたお師匠さんは吉原の芸妓であつたそうで、実にその芸は水際立っていた。吉原の芸妓は芸そのものであるからだ。この会で本場の江戸情緒に酔いしれて、ひととき生活のうさを忘れたのだつた。

長唄、清元、常磐津、端歌、小唄三曲の名演技の後で、誰かが私を指して「さあ真打ち出て下さい」と言った。なぜかというこの会のために苦心してプログラムを作り、おいもでないお菓子を調達した功績によるもので

あった。私も若かった。ままよ、私は義太夫とゆこう。豊竹呂升の向こうを張って娘義太夫ということにおだて^{かたぎぬ}られた。まず肩衣はハトロン紙に絵をかいて作り、見台はその辺にある木の箱をおいた。演じるものは「酒や」である。私の相三味線は、れっきとした玄人である。

私はいい気なもので芸を見て貰うのだから衣装なんか問題ではない。かんざしを落としたり首をふったり、懸命にたっぷり語り、語り終ったら、いやに座が静かなのだ。客はみんな帰り、ご馳走は空になっていた。

何のことはない、落語の「ね床」を地であったのだった。今思い出しても笑いは止まらない。なんと楽しかったことだろう。

それから東京で芝居があく頃になって「鵠

沼天狗会」はいつとはなし集まらなくなった。

当時を語り合う人々はみな他界された。別荘の奥さんとしてご主人につくし、どういうものか実子がなく義理の子供さんを育て、ひかえ目に日蔭に生きた女人達は寂しく一人住まいになって、別荘で、また老人ホームで終っていった。感無量である。

あのすさんだ終戦後の世に本当に美しいなつかしい思い出となって私は忘れることができないのである。

(昭和六十年三月三十日)

幻のハマボウフウをそだてる

伊藤節堂編

はじめに

昭和四十五年四月新潟日報社の依頼で、同紙「家庭」欄コラムに連載したとき、私はハマボウフウをつぎのように書いた。

防風 日本海の荒波もいつしかおさまり、砂丘に陽炎^{かげろう}がもえて、ヒバリがさえずり出すと防風の若芽が顔を出す。

海辺に生えるので浜防風と呼ばれ、山地にはえるものと区別されているが、その葉はセリに似て砂に張り付いたように四方に広がっている。まわりの砂を掘れば小指ほどの太さで二〇センチぐらいのものが簡単に採れる。

牧野富太郎博士が命名したセナミスミレの咲く瀬波温泉（村上市）の砂丘地帯に自生するし、岩船港が見える灯台下の砂山には子供

が終日遊びに来て防風を掘ったものである。

ちよつとゆでて酢みそで食べるが、ご飯にもよし、酒の肴によし。野生の味とかおりが食卓に春を呼ぶのである。」

これは郷里の情景であるが、あれから十五年たつたいまでも、容易に探すことができるようである。

ところで「浜防風」の名称であるが、私は「浜風や浜砂を防ぐ」意味と思っていた。ところが稲山光男氏によると、「防風」は漢方薬として風邪を予防する意味からきているという。

また「浜防風」と「防風」とは全く違う種類であると、佐竹義輔の説明がある。

一、原色牧野植物大図鑑

ハマボウフウ〔セリ科ハマボウフウ属〕

（ヤオヤボウフウ）

日本各地、及び千島、サハリン、オホーツク海沿岸、ウスリー、朝鮮、台湾、中国の温帯から亜熱帯に分布。海岸にはえる多年草。

地上茎は砂上に出て、高さ五〜一〇cm、葉は砂上に展開し、厚く光沢がある。花は初夏から夏。

葉は刺身のつまとして食べる。八百屋に売るので「ヤオヤボウフウ」。(昭和57年北隆館)

二、藤沢のハマボウフウ

藤沢の昔を語るときに忘れてはならないものは、加藤徳右衛門の著書「現在の藤沢」である。この書は昭和八年に出版されているが、五十年前のそのころ、ハマボウフウは鵠沼よ

りむしろ辻堂に産したようである。

「鵠沼海浜から辻堂一帯の砂地には、香りの高き防風と称する海浜植物の新芽、此方彼方に萌出て、女、子どもおもしろく容易く掘ることが出来る。また、春雨の小松林の下には松露が発生する。

これらの防風狩とか、松露狩とかの家族連れその他団体などが来り遊び、まるでお祭り騒ぎたる奇観を呈し、近在の菓子商連中は、天幕を持ち出して売店を開設するなどの物凄い光景を示す。」

このように天然の産物として豊富に採れたハマボウフウは、鵠沼、辻堂海浜の特産として、藤沢の名産中にその名を連ねた。

三、藤沢の銘菓「浜防風」

この豊富な天然資源にいち早く目をつけ、加工食品として商品化に成功したのが、豊島屋本舗初代善助^{ぜんすけ}であった。

藤沢本町一ノ三ノ二八に京都風の和菓子屋

のたたずまいを見せているのが老舗豊島屋本舗である。嘉永三年1850に初代善助が遊行寺通りの本家砂糖問屋（藤沢一ノ三）から分家して現在地に菓子屋を開業した。

アイデアに富む善助は湘南海岸一帯の砂浜に生えるハマボウフウに目をつけ、この茎を短く切って砂糖漬けにした菓子を考案して売り出した。

製法のポイントは独特の香気を失わないこと、ほどよい歯ざわりがあること、しなやかな茎にたっぷり砂糖を含ませることなどであった。

かくして野趣あふれる藤沢の銘菓「浜防風」が誕生した。

当時、参勤交代の大名は藤沢で宿をとったが、ある殿様は銘菓「浜防風」の珍味がことのほか気にいり、藤沢に泊まるたびに必ず買上げ、国もとへの土産にしたという。

四、砂丘と共に消えたもの

「辻堂のあゆみ」の著者落合久夫氏によれば『辻堂もいまは殆ど都会化してしまい、特別に誇れるような名産物もなくなりましたが、昔はそれでも、これは辻堂のほかにはないだろうと自慢できるものがいっくらありました』

という、「ながらみ」「しらすの畳干し」

「防風」「松露」の4つをあげている。また

『防風』は三月下旬から五月初旬にかけて海軍の演習地の砂上に生えるもので、私ら子供は勿論、大人までみんな採りに行ったもので、柔らかくて芳香があり、刺身のつまに珍重しました。

しかし、昭和十二年頃から、どうゆうわけか心臓の薬になるといい出し、心ない人たちがそれこそ根こそぎ採っていつてしまった。それで激減したのだが、現在では団地が出来て砂丘がなくなり、よほど探さなければ見つけられない。』

と、少年時代を懐かしむ。この

防風と松露は、藤沢駅でおばあさんたちが、

露店を出して売っていて、江の島帰りの客がよく買っていたそうである。

五、鵠沼砂丘で見つける

昭和五十四年四月十七日朝七時半、鵠沼海岸のサイクリング道路を歩いていた私は、すぐ目の前にハマボウフウを二株見つけた。

場所はブルガーデンから一〇〇ほど西で、いつも地引網の舟が据えられているところから二桝目の砂防簀垣の中であつた。

このあたりは前年の冬に、ブルドーザーで砂丘を削ったところであるから、ひよつとしたら何年か前の種子が太陽のぬくもりで発芽したのではないかと、一瞬奇異な感じさえた。さて、これを保存するにはどうすればよいかと、振り返り、振り返りしてその場を去った。

それから十一日だって、四月二十八日の朝ふたたびここを訪れた私はアツと驚いた。あの若々しいハマボウフウが、二株ともめき盗

られてあとかたもないのである。

六、ハマボウフウの人工栽培

私たちはともすれば、貴重な植物が乱獲されたり、開発の波に押し流されたりして年々姿を消して行くのを、もはやどうすることもできないこととして哀しみ、そしてあきらめてしまうようである。

しかし、そんなに簡単にあきらめてしまわないで、種子を撒いて育ててみたらと私は、思うのである。

最近いろんな植物が人工栽培されて市場に出廻っているし、野菜も元はといえば、山草や野草を人工栽培して改良を加えたものである。それならばハマボウフウだって、人工栽培することができはるはずである。

七、元禄の人工栽培

ある日、図書館で「古事類苑」という本を調べた。頁をめくるだけでもううんざりするよ

うな大冊であるが、それでもハマボウフウの人工栽培のことをとうとうみつけた。

それには元禄十年宮崎安貞の著書「農業全書」の中の一部が紹介されていた。

防風 これは葉種の防風にてはなし、海浜の和かなる白沙に生ず、その茎あかく、その葉もその香りも防風に似たる物なり、茎を取りわけて^{なます}膾の具に用ひ、あるいは酢にひたして食ふ、甚だその香よく味よし。

実を取りて沙地の畠に植えて、少し手入れすれば、よくさかゆるものなり。大邑（人口の多いところ、都会）に近き所は、多く実を蒔きて作り、市町（市場や町）に出すべし』

八、川口市の人工栽培

『朝日百科世界の植物』によると、稲山光男氏の解説で

『江戸時代には野生のものを採集して売っていたが、明治に入って栽培するようになった、川砂をおおって軟化もするようになった。』

現在、東京市場の入荷量のうち九五パーセントまでが埼玉県川口市産のものである。葉に刻みの多い切菜種と、刻みの少ない丸葉種があるが、外観の美しい切葉種がよろこばれている。

つくり方は、まず四月に種子をまき、株を養成し、十一月に掘りとり、地温が二〇度前後の床に伏せこむ。ときどき水をかけて日をおいをしておけば、二週間ぐらいで十二センチ前後に伸びるから、日入れ、といって二日ばかり日に当てる。葉はつやのある濃緑に、葉柄は鮮やかな紫紅色になれば理想的で、これを収穫する。

約十日ごとに葉柄の基部から切りとって生食することができ、三月下旬ころまで続けて収穫できる。』

九、ハマボウフウの鉢作り

また、「講談社園芸大百科事典」によると、太田萬里^{まさと}（氏がつぎのように解説している。

『花はごく小さいが、セリ科特有の集合化で白く目立ち、紫色を帯びた葉とのつり合いが美しい。丈夫で栽培はやさしい。全体に小さくまとまり易く、鉢作りに好適である。』

移植するときは、直根を多少残すようにする。短く切つてもしおれることはまずない。砂浜で成長したものは、根が水分を追って深く長くなっているので、掘りあげても深鉢でないと植えられない。

浅鉢に作るには、小苗を植えつけるか、実生作りにするのが理想的である。よく日が当たって風通しの良い場所を好み、多湿を嫌う』

十、夢のハマボウフウ

山菜によつて生計を立てる地方では、山菜採りの掟ともいうべきマナーが厳しく守られているのである。たとえば「ゼンマイは五本に一〜二本は残す」「タラの芽は五月に入つたら採らない」などである。レジャー人士に山入りを許すと山菜は全滅するという。

ハマボウフウについても同じことがいえるとおもう。昭和の初めならいざ知らず、もはや湘南砂丘にハマボウフウを求めることはムリというものであろう。

それならばハマボウフウを懐かしみ愛好する多くの皆さん！ プランターや植木鉢の中で夢のハマボウフウを育て、独特の香気と味覚を楽しもうではありませんか。

—— 完 ——

(昭和六〇・五・一六記)

(文献)

加藤徳右衛門「現在の藤沢」

落合久夫「辻堂のあゆみ」

神宮司庁編「古事類苑」

島 武夫「神奈川における老舗の商魂史話」

神奈川新聞「かながわの和菓子」

牧野富太郎「現色牧野植物大図鑑」

朝日新聞社「朝日百科世界の植物」第三卷

講談社「園芸大百科事典」第三卷

芥川龍之介の「月光の女」について

葛巻 左登子

本誌第二十三号で富士先生より、所謂「月光の女」についてのご疑問が提出され、本年一月の例会の席上でも、先生のお言葉がありました。このことは大方の人々の関心事とも思われず差控えておりました。然し私どもも最早老年に入りましたし、将来を考え、この際一筆することになりました。

それで、芥川の叔父がその生涯に於て、何等かの掛かり合いを持った女人としては――妻君の芥川文を除いて――以下敬称略

①吉村千代――これは龍之介の実家（新原敬三宅）のお手伝い――当時（大正三年）数年十八才――で、私の兄義敏の幼稚園の送り迎えをしていて、その後私どもの母（龍之介の

姉ヒサ）の再婚先に伴われて参り、そののちいろいろと紆余曲折があつて、日支事變の頃、長崎で死去しました。龍之介の没後、その大学ノートに千代宛の恋文の下書きが見付かり、これは葛巻義敏編「芥川龍之介未定稿集」に載せてあります。

②吉田弥生――謂う所の初恋の人と喧伝されましたが、芥川家の反対に依つて、大正四年陸軍将校と結婚、終戦後に亡くなりました。

③S・H夫人――横須賀在住、大正六年頃芥川と同じ海軍機関学校の物理教官の夫人。

④小林勢以子――谷崎潤一郎の義妹、後年葉山三千子名で映画女優もした人、華やかな性格で大正七年頃芥川周辺の文学青年たちの女王的存在。「或る阿呆の一生の十七蝶」に当る。

⑤小町園の御内儀（野々宮豊子）——京都のさる神官のご息女、従って女芸一般の嗜みあり、その書簡などは到底、芥川文（跡見花蹊の弟子）も及ぶ可くも無し、芥川とは大正七年頃よりの知己。右「阿呆の一生の十八月」に当ります。

蹊

⑥秀しげ子——太田水穂門の歌人、大正八年十日会で知る。龍之介が終生、その最後の時に近くまで悩ませられた人。義敏は、芥川宅に来られた際、駅まで送ったりして、単純な人柄と云っております。同じく「二十一狂人の娘、三十八復讐」、戦後八十三才で亡くなられた由。

⑦松村みね子——故日銀理事未亡人片山廣子、愛蘭土文学者、竹柏園歌人「三十七越し人」

⑧平松万寿子——妻芥川文の幼な友達（二十才

年長）、文が昭和二年になって主人龍之介の話相手として、芥川宅傍に家を世話して住わせた人、同年四月七日夜に帝国ホテルで心中する約束をした。但しこれは実行されず。——中野妙子著「追想芥川龍之介」に「心中事件は二度あり」と記されているのは誤り。——同「四十七火あそび、四十八死」に当る。

右、千代にしろ、弥生さんにしろ、勢以子さん、片山夫人、平松万寿子さん、皆それぞれ好きな人達でしたがもう居られません。

それで富士先生ご疑問の「月光の女」に絞ると、③のS・H夫人と⑤の小町園の御内儀が問題になるわけですが、S・H夫人のご夫君は云わば芥川の同僚でした。当時の龍之介は秀才型の新進気鋭の作家として、横須賀の夫人方の集まりにも顔を出していたようです。その後、なにやらこの御夫君を揶揄した文章を認めたことがあったとかで、同校の校長が仲裁に入り和解した事件があった由です。仄

聞いたしますところでは、この御夫妻が芥川
没後「吾こそは月光の女なり」というような
御本を出版されているとのこと、それで富士
先生はこの方こそ、とお考えのようなので私
は書簡集を丹念に調べ、ここに記させて頂き
ます。

(H?)

—

(大正6年4月13日 S・K様宛)

「春寒や竹の中なる銀閣寺 嵐山 龍

十三日

奥様におよろしく先日は失礼しましたから」

(同年八月二十九日田端から ご夫婦宛)

「愈々休みがなくなるので心細くなつてゐま
す 航海記これへ封入します甚恐縮ですが私
のスクラップブックへ貼る分ですから御よみ
ずみの後は私迄御返し下さい さて私はこの
手紙を書きながら大に良心の呵責を感じてゐ
ます これは特に奥さんへ申し上げますもつと
早く書くべき手紙でもあればもつと早く送る

べき航海記だったんです誠に申し訳ありません

しかし私が用で忙しくない時は遊びまわる
ので忙しいことはお察し下さい横須賀に善友
がいる程それ程左様に東京には悪友がゐます
私は彼らに誘惑されて無闇に芝居を見たり音
曲を聞たりしてゐましたそこで精来の筆無精
が益不精になつてしまつたのです 今悪友の
遊びに来てゐた連中が帰つたところですから
してそのあとが甚静な夜になりました私は小
さな机と椅子を縁側へ持ち出してこれを書いて
ゐるのです

即興

銀漢の瀬音聞ゆる夜もあらむ

これで止めます 頓首

八月二十九日

(年不詳、S御夫君宛)

「昨晚はご馳走に相成難有くお禮申しあげま
す 今日までまだ酔がさめない形で少しフラ
フラしてゐます 授業も貽蕩として甚いい加

減にやりました、ご都合で来週でもさ来週でもお遊びにお出下さい

右御禮旁々御さそひまで

奥さんによろしく

「

(大正八年二月二十六日 田端から御夫婦宛)

「御見舞難有うございます 日頃煙草をのみ過る事が崇つて咽喉を害し甚困却して居ります しかしもう大分よろしい方ですから乍憚御休心下さい

病間やいつか春日も庭の松

」

(他にS・H夫人の友人らしき人宛に、大正八年三月六日鎌倉よりとして)

「拝啓あなたの御手紙も句会の通知も私が風をひいて東京で寝ている間に来たのでどちらもやつと今日拝見した次第です もし前に読むことが出来たら句会へも出かけるのだったと大に残念に思つてゐますこれは決して好い加減な形容ぢやありませんと云うのは私も近

くここの学校をやめて東京へ舞ひ戻る事になったので御暇乞ひ旁々あなたの所へも上りたいと思つてゐたのですだからそれが句会なら猶更都合が好いと思つたのです 所での相談と云ふから申上げますが近々又雀の舍俳句会をあなたの所で開きませんかそうして私を出席させてくれませんか、そうすると私は(六字不明)のみならず横須賀にも御暇乞をする(九字不明)会に出席します 私の都合は十五日以前の金土日がよろしい時間は午後でも夜でもかまいません(朝は学校があるからちと困ります)会は元来私はみすてんだから句会が歌会になつても恐れずに出席します 以上の条件で私の為にあなたを訪問する機会を大袈裟にしてくれませんか 右御相談旁々御手紙を拝見した御返事まで

この頃教育業をやめるのだと思ふと甚愉快ですそのせいか汽車の中から見る景色も皆春気を帯びてゐるやうな気がしてなりません 春に入る竹山ならん微茫たる

三月八日

岩淵百合子様

「

右以後は、叔父死去に至るまでお三方宛
のは無し。

一方小町園の方は、大正六年五月二十四日
鎌倉野間栄三郎方より池崎忠孝氏宛に、鎌倉
へ来遊を誘い「場所は小町園にしよう」と
あり、大体この頃には小町園を知っていたこ
とと思われます。但しまだ御内儀は意識せず。
当時の小町園はフランス料理店であるとともに
旅館でもあって、高田保氏も作品中にこの
御内儀さんの事を書いて居られます。

大正六年九月十三日田端から菅忠雄氏宛の
書簡の冒頭に、「あなたは私にあやまる必要
も何もありません 弟は小町園が宿屋だと云
う事を知らなかったのですさうして私が小町
園の女中と関係でもあるように思ったのです
(あなたもそう思つてゐたかもしれませんさ
う思うと苦笑が出ます) しかし私がその誤解

を解きましただからもう心配する事も何もな
いのです 私は来年結婚します勿論そういふ
前に、外の処女と関係する程墮落してはゐま
せんその辺も御安心なさい 機関学校の教官
と作家とを区別しなくともいいのです。

あなたがゐなくなつて淋しくなつたしする
から、私は横須賀へ転居します 先は横須賀
市汐入尾鷲梅吉方です明日移ります日曜にで
も暇があつたら遊びにいらつしやい。

十三日夜

菅 様

二伸ツルゲネフだけは私の持つてゐる全集
の一冊ですからなくならないやうに気をつけ
て下さい これはよく御願ひします」と認め
ています。

(註) 文中の弟は龍之介の異母弟(新原得二
で後年実家を継いだもう一人の叔父)前回申
上げたように歌舞伎好きが昂じて大正八年頃
岡本綺堂の弟子となり、二三戯作もしました
が昭和五年急病のため三十才で没しました。

菅忠雄さんは菅白雲先生の御子息で、新原叔父と同世代のため一緒に大学受験もしたりしていました。戦後亡くなられました。

以上、勿論私どもは叔父龍之介と小町園御内儀が、どのような交際をしていたか詳しいことは存じませんが、兄は大正十五年末日から元旦にかけての事件ではば察しました。(このことは富士先生がお書きになっ
ていられるので略します)

私は昭和二年七月二十四日に叔父が没し、その初七日の翌日の午下がり、俵で鎌倉から東京田畑の芥川宅まで小町園の御内儀さんが、お独りで、ひそやかに弔問に來られたことが余りにも印象的だったので、そのことを申し上げたく存じます——当時芥川にはお手伝が居りませんでしたので、二十四日から暫くの間私が手伝っており、比呂志たち三人は叔母の実家(鵜沼)に預けましたので、大人許りでした。

その日は余りにも不意のことだったので、

みんな驚きました。この日大伯父は留守でした。二時過頃でしたでしょうか。門があいて——当時芥川では茶の間の廊下から來客が見えるようになっていて——御婦人が入り、その後から俵屋くろまやさんが梶棒を前庭に下ろしました。叔母(文)がすぐ御案内をして玄関に入らず枝折戸から庭を通って書齋にお通しました。最初は大伯母(養母儔ととも)と文叔母が御接待に出て、その間私は大伯母(ふき)に云われて車夫の方にお茶を持参しました。暫くして儔伯母とともが茶の間に戻り、代ってふき伯母が書齋に参りました。いろいろのお話があったのでしよう。三時半頃叔母文が慌しく走ってきて、私に「早くみて、みて、とっても奇麗よ」と云って二人でこの廊下から俵に乗られるのを垣間見ました——大伯母ふきが書齋でお見送りしたのでした——黒の紹羽織を召して、髪は当時「行方不明」と称された巻髪にして、色白のほっそりとした、美しい方でした。

その後この昭和二年秋の帝展に鏑木清方が「築地明石町」を発表され、当時大変に評判になりましたが、私には、この絵と先の日の小町園の御内儀さんの姿とが重なり合つて、未だに忘れられないであります。——なお、中野妙子著「追想芥川龍之介」には「主人の生前に、文が時々小町園に行つて女主人に相談した」という意味のことが認められていますが、これは間違いで、また一寸他の話になります。越し人の片山夫人も叔父死去の翌二十五日の午後に田畑の家に弔問に見え、この時は菊地さんが家人に代つて玄關までお見送りしたので、この本に書かれているように谷中斎場にはお出ではならず、従つて「芥川と才力の上でも格闘出来る女、それは私です」云々などというのは全くの嘘です——叔母文が語つたということです、私どもには未だに信じられずにあります。

ともあれ「月光の女」が誰であつたにせよ、叔父龍之介にとっては唯一のひとであつたの

に違ひないのであらうと考えております。

(了)

(一九八五・六・一〇)

附記

猶、第二十三号に富士先生は「芥川は震災のことについては一言もふれていない」とお書きになつて居られますが、当時、私も罹災して芥川に避難し覚えておりますが、叔父は若き日の川端康成さんを伴つて、吉原その他の被災地を毎日見て廻り、また裏庭に自警団の番小屋が急造されたので、町内の方々と毎晩夜廻りを——これは可成り後まで——しておりました。それで「大震雑記一、二、三、四、五、六」「大震日録」「大震に際せる感想」「東京人」「廃都東京」「震災の文芸に与ふる影響」「古書の焼失を惜む」「鸚鵡——大震覚え書きの一冊」などを、中央公論、改造、文章俱樂部その他の雑誌に書いております。その後創作集「百艸」に纏め、全集にも載つて

おります。

また これは余談の余談ながら、私の母は「龍ちゃん、成瀬さんの妹さんがとても綺麗なので、大分気があつた様子だった」と申して居りました。それは大学に入って早々のことらしく、友人成瀬正一さんの御父様は銀行の頭取（成瀬正恭氏）でしたので、叔父には全くの憧憬に終わったのでしょう。それで話は大変とびますが、私が数年前、富士先生の奥様に初めてお目にかかった折、面差しが写真で見る成瀬さんに何処となし似ていられ美しい方でしたので、私はハッ！としまして、その後先生に伺いましたら、奥様のお母様が成瀬家のお出でいらつしやることが分り、何か不思議なご縁でも？と存じております。これは奥様のお兄様が故成瀬正勝氏のお跡をお継ぎなつて何代目かの「犬山城主」になられたお話を伺った故でもございますが・・・。

荒城の月

土井晚翠作詞
瀧廉太郎作曲

- 一、春高樓の花の宴 めぐる盃かげさして
千代の松が枝わけいでし 昔の光りいまいずこ
- 二、秋陣宮の霜の色 鳴きゆく雁の数見せて
植うるつるぎに照りそいし 昔の光りいまいずこ
- 三、いま荒城のよわの月 替らぬ光たがためそ
垣に残るはただかづら 松に歌うはただあらし
- 四、天上影は替らねど 栄枯は移る世の姿
うつさんとてか今もなお 嗚呼荒城のよわの月

鵠 沼 昭和 6 0 年 7 月 号
通 卷 第 2 7 号

昭和 6 0 年 7 月 9 日 発行
編 集 ・ 鵠 沼 を 語 る 会

藤沢市鵠沼海岸 2 - 1 0 - 3 4
鵠 沼 公 民 館 内
電話 3 3 - 2 0 0 1 、 2 0 0 2